

【別紙様式 I】 令和7年度 学校評価報告書

学校名 厚木市立毛利台小 学校

校長名 山田 香

厚木市教育委員会の基本目標		1 自ら学び、鍛え、未来を拓き、夢や可能性に挑み続ける力の育成【挑戦】 2 自他の命や豊かな感性を大切にし、多様性を認めながら共に生きていく力の育成【共生】 3 変化する社会に自ら進んで関わり、人々と協働してより良い社会を創る力の育成【創造】		
学校教育目標		学校経営の方針		
未来に向かってのびやかに生きる子どもを育てる		・小学校は、人生の根っこづくりの時期・・・未来に向かってのびていくじょうぶな根っこを育てよう ・そのためにたくさんのおやさんの栄養をたくわえよう⇒栄養とは、高い自己肯定感 ・将来、困難にであって「きつとだいじょうぶ。なんとかなるし、なんとかしよう」と手探りでも道を探していける ○学校経営の土台 インクルーシブな教育＝ひとりひとりがみんなを支え、みんなに支えられてひとりひとりがか がやく		
今年度の重点目標				
【確かな学び】・よく考え、自ら学ぶ子の育成⇒「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善				
【すこやかな体】・健康で気力に満ちた子の育成⇒基本的な生活習慣形成のための指導の充実と安全教育・健康教育の推進				
【豊かなこころ】・認め合い、支え合い、協力し合う子の育成⇒主体性を高め、人との繋がりを大切にしたい人間関係・集団作り				
評価項目・指標等	基本目標との関連	具体的な取組	成果と課題	次年度への具体的な改善策
(1)確かな学び ○評価項目 学校づくりアンケート番号 ③⑦⑧	1・3	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究において「自走する学び手の育成」を目指して研究に取り組んだ。 ・家庭学習を一律の「宿題」ではなく、自分にあった課題に自主的に取り組む。毛小チャレンジの設営 ・GIGAスクール端末の活用により、児童の思考の深まり、児童間の考えの共有の活性化を目指した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研究では、昨年度まで研究してきた「自己調整力」を身に付けさせたい力として「自由進度学習」に取り組むと同時に「記号接地」について研究を進め、プレイフルカード等を使用して知識を生きた知識にし、「自走する学び手の育成」を研究した。 ・家庭学習を一律の「宿題」ではなく自分にあった課題に取り組む自主学習へ移行した。保護者アンケートでは児童が家庭学習に取り組むことへの肯定的な回答が減少した。児童が自ら学ぶために必要なこと、保護者のサポートの仕方などが課題に挙がったので、学校としてできることを考えていきたい。毛小チャレンジは、一定の児童にとっては効果的ではあったが、全体に浸透していないことが浮き彫りになった。強制ではなく自発的にできるようにするためには、学校として仕掛けを考えてく必要がある。 ・校内でのGIGAスクール端末の利用は活発に行われていると考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ③昨年度は宿題を出しているクラスもあったが、今年度は全く宿題を出していなかった。その差ではないか。自主学習の意味をもう一度確認することと自主学習を選択できない児童・家庭へのサポートが必要である。学校で学習した体験的活動を知識に変換する作業を自主学習に転換させる方法を考えていく。 ⑦児童の結果が9割以上数値がでていることから、授業では積極的に活用されていると考えられる。しかし全体的には低下傾向にある。今年度1年生は使用頻度が少ない。また、手書きでの作業も大切とされる流れが教職員の数値には影響されていることも考えられるので、児童にとって良い方法を考えていく。 ⑧児童は楽しんで学習に取り組んでいる様子はよく見えている。目標設定の仕方に力を入れる必要がある。
(2)すこやかな体 ○評価項目 学校づくりアンケート番号 ④⑤⑥	1・2	<ul style="list-style-type: none"> ・体育委員会の外遊びイベント、なわとび週間等全校で児童の体力づくりに取り組んだ。 ・交通安全教室の実施や通学路の見直し、登下校指導など交通安全に対する児童の意識を高めたり、避難訓練を通して、自分の命を守る意識を高めたりする取組を継続して行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育委員会主催の外遊びイベントやなわとび週間などには多くの児童が積極的に参加する姿がみられ、運動すること自体にはどの児童も抵抗なく取り組んでいると考えられる。 ・12月よりロング昼休みを週3回に増やしたことで、外で遊ぶ児童が多く見られた。 ・地域の方の見守りが充実しており、今年度も大きな事故はなかった。しかし、自転車乗車時のヘルメットの着用や防犯ブザーの携帯率を見ると十分とは言えない。学校と家庭の両方で呼びかけを継続していきたい。 ・避難訓練を通して、「自分の命は自分で守る」という意識を高める取組みを継続して行ってきた。避難訓練では、緊張感がない児童も見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ④11月から昼休みが長い日が増えたので、外で遊ぼうとする児童が増えるよう委員会活動などを活用して、児童から遊びを広める工夫をさせたい。また、夏の猛暑で外遊びができなかったため、来年度からは体育館のエアコン使用ができるようになるので、運動する機会をふやしていきたい。 ⑤防犯ブザーやヘルメット着用率を上げていくために、安全への指導啓発や保護者への呼びかけを継続して取り組むことが必要である。登下校時に地域の方を含め、たくさんの方の方々に見守られていることが児童の安全につながっている。 ⑥委員会や食育で「早寝、早起き、朝ごはん」の大切さを呼びかける機会を増やしたい。また、家庭の協力が必要不可欠なので、学校講演会など、保護者にも呼び掛ける場を考えていきたい。

<p>(3)豊かな心 ○評価項目 学校づくりアンケート質問 ①②⑩</p>	<p>2・3</p>	<p>・リソースルームの配置の工夫や整備、心の教室の整備をした。</p> <p>・職員のインクルーシブ教育に対する意識を高めるために、校内研究と合わせて研修会を設けた。</p> <p>・児童運営委員会を中心に立案して学級、学校運営協議会委員などと共に様々な形態で「あいさつ運動」を展開した。</p>	<p>・学校は楽しいと回答している児童は90%で、肯定的な回答が多く見られた。引き続き児童にとっての「楽しい学校」をめざしていきたい。しかし、困ったことがあった時の相談に不安を抱えている児童が8%いた。</p> <p>・市から派遣していただいているリソースルーム支援員を十分に活用したり、特色ある学校づくり交付金の予算を使い環境整備や教材教具の工夫をしたりした。</p> <p>・インクルーシブ教育の研修を校内で行い、校内研究で「自由進度学習」を推進したことで、職員の授業改革の意識が高まった。</p> <p>・あいさつ運動を展開したことにより、アンケートの数値的には教職員は同じ、保護者は増加している。あいさつをする意味や、あいさつによって生まれるコミュニケーションの心地よさ等を実感させられる取り組みを入れていく必要がある。</p>	<p>①教職員と保護者の数値について多少の減少が示されている。教職員、保護者ともに100パーセントを目指して今後も児童に関わっていききたい。具体的には、児童のアセスメントを丁寧に行い、児童や保護者との対話を通して学校生活が充実したものになるようにしていきたい。</p> <p>②あいさつをする意味や、あいさつによって生まれるコミュニケーションの心地よさ等を実感させながら、あいさつのできる児童を育てていきたい。</p> <p>⑩学校が楽しいと心から感じられるような、自己肯定感を高める関わりを学校全体で行っていきたくと考えている。学校の大部分を過ごす学級での学習時間の充実、サポートミーティングを通した児童の自己決定等を大切にしていきたい。また、週3日あるロング昼休みにおける他者との交流、その生活の中で生じるさまざまなトラブルや不安感に丁寧に関わり添っていききたい。</p>
---	------------	---	--	--

今年度の学校関係者評価委員会からの意見

- ・家庭学習は自主学習という形だと取り組むことができない子もいるのではないか。
- 【学校側の見解】→学校でやるべき内容はしっかりと指導し、児童の学力や学び方は多様になっているので、家庭では自分に合った内容を自分に合った方法で学習していく力を身に付けさせたい。
- ・毛利台地域として、地域の方が放課後塾のような取組をして学習面の手助けができればよい。
- ・体を動かし、外で遊ぶ児童が減っている。地区によっては、公園などで元気に遊ぶ姿も見かける。
- ・学校の相談体制は、学校だよりなどの発信から、チームで行っていることが理解できる。たくさんの相談できる機会があることは良いことだと思う。
- ・いじめの認知数や内容について理解できた。

今年度の学校経営のまとめ・次年度への改善の方針

・インクルーシブ教育を中心に、チームで様々な教育活動を行うことができた。実践的な取組になるように職員で共通理解をしながら検討を進めた。今年度も引き続き学校教育目標が「未来に向かってのびやかに生きる子どもを育てる」に変わり、校内研究の主題は「自走する学び手の育成」とし、学校教育目標の具現化に向けて、組織的で機能的な学校運営を心がけることができた。学校運営協議会においても地域学校協働活動推進員を中心として運営方針について丁寧に検討を重ね、「みつやパートナー」の運営基盤が整い、様々な教育活動を地域の方々と共に取り組むことができた。次年度も更に「個別最適な学びと協働的な学び」を推進し、「自己調整力を育む授業実践」を重ねながら、教職員とめざす児童像を共有し、連携し地域と共によりよい学校経営に取り組んでいきたい。